

An Analysis of Japanese Discourse Skills Used in Students' Drama Performances : From the Approach of Conversation Analysis

日本語学習者の演劇パフォーマンスに見られる談話技能の分析
—会話分析的アプローチの観点から—

Yoko Nakai

(Waseda University)

会話に積極的に参加しながら話を進めたり、話し相手を会話に引き込んだりするような談話技能がある(cf.中井 2003、2004 等)。また、言語的・非言語的に工夫をして説明を分かりやすくするような技能もある(cf.ザトラウスキー2001、2002 等)。このような談話技能は、シナリオで反復練習できる演劇活動の中で練習するのも良い。中井(2003)では、中上級の日本語授業で行った演劇プロジェクトにおいて指導項目とした談話技能についてまとめた。本研究では、この談話技能が、演劇上演談話の中で、実際にいかに用いられて、登場人物の参加態度が表現され、観客を引き込むようにしていたかについて分析する。

まず、言語的要素の指導項目については、学習者達は、あいづち、評価表現、さえぎり発話等を用いて登場人物の参加態度を表し、観客を引き込もうとしていた。しかし、日本語のあいづちは、学習者の母語とは異なったタイミングで用いられるため、上演中、少し不自然になっていたものもあった。次に、非言語的要素では、*iconic*、*metaphoric*、*deictic*、*beat* による手ぶり(McNeill 1992)を用いて、説明中の抽象的な概念をより視覚的に観客に訴えようとしていた。さらに、音声的要素では、長母音、アクセント等にまだ母語の影響が見られ、聞き取りにくい発音になっているものも見られた。しかし、賛成・反対等の態度を表すイントネーションやリズムの使い分けは意識的に用いていた。最後に、言語・非言語・音声の総合的要素では、言葉の強調や説明をしたり、観客を引き込んだりするために、手ぶり、視線、うなずき、質問表現、終助詞「ね」、声量、絵・写真等を組み合わせて効果的に用いようとしていた。

本発表では、上記のような談話技能が実際の上演談話でいかに用いられているかについて、上演ビデオと文字化資料を見せながら、分析報告する。